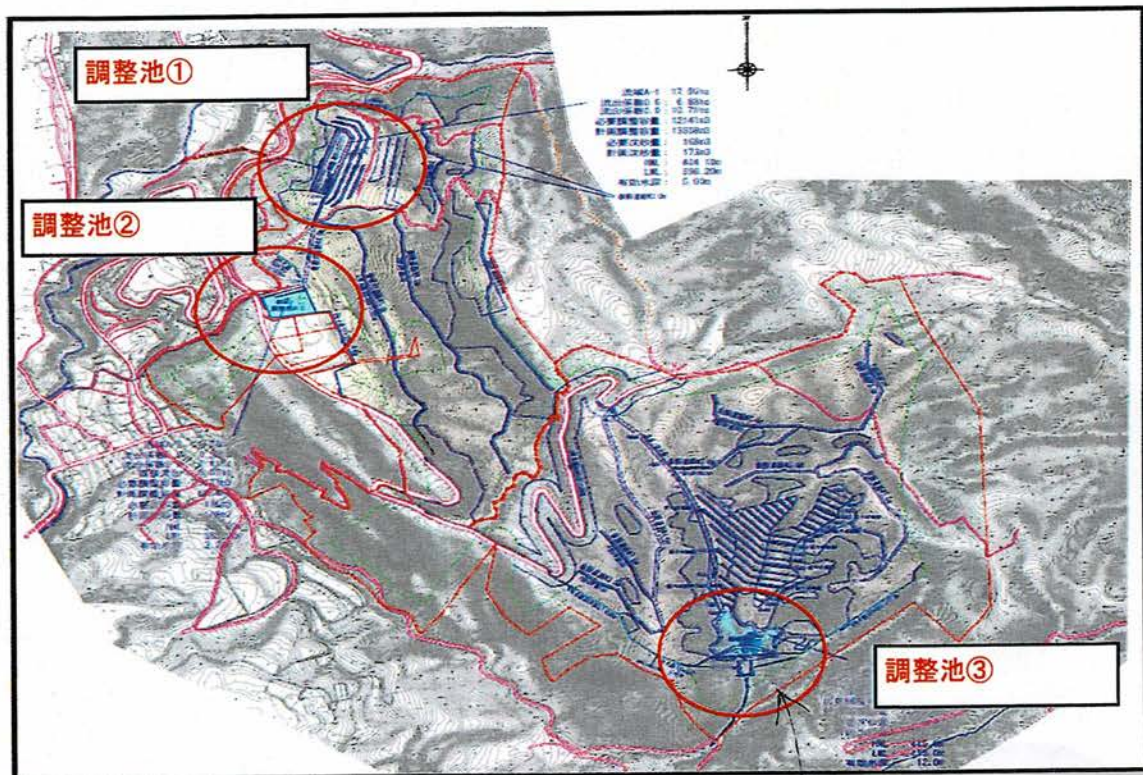
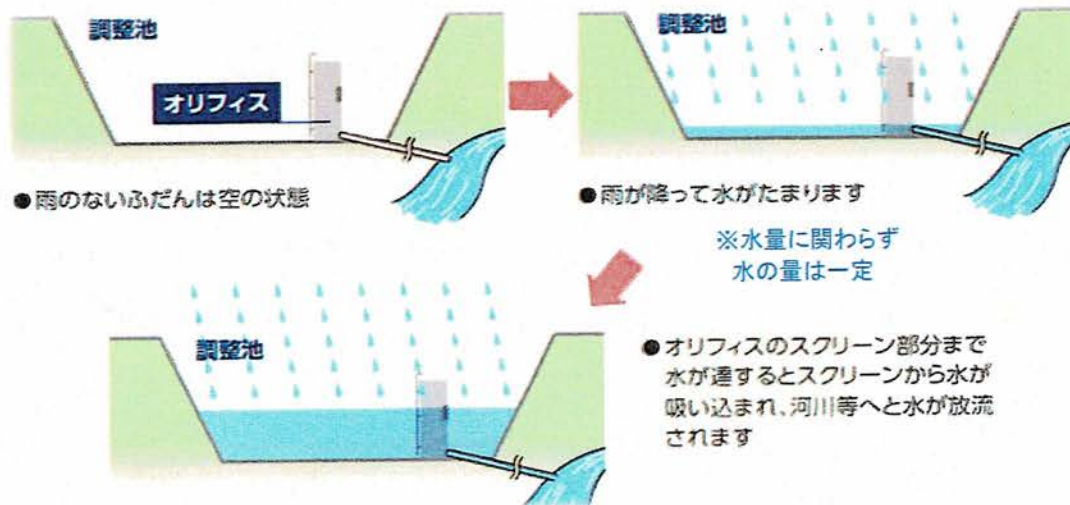


◎雨水調整池:3カ所設置予定

貯留量:概算5.6万m³(56,000トン)=約25Mプール156個分 ※3つの調整池合計
 (小学校の標準的なプールサイズ:幅12m×長さ25m×深さ1.2m=約360m³=360トン)

▼調整池とは

山などの開発を行うと、一般的に雨水流出量が増えるので、集中豪雨の際等に河川が氾濫する恐れがありますが調整池で雨水を一時的に貯水することで、河川に一気に雨水が流れ込むことを防ぎます。
 調整池には、貯まった雨水を調整して河川に流す孔が設けてあり、これにより水量を抑制します。



中80mの小型ダム相当.

調整池及び流水に関する係数についての補足資料

* 50年前のダケランが造成工事では調整池は老慮されて下流の丹那住民は大雨時に常にあふれる水に苦勞しています。

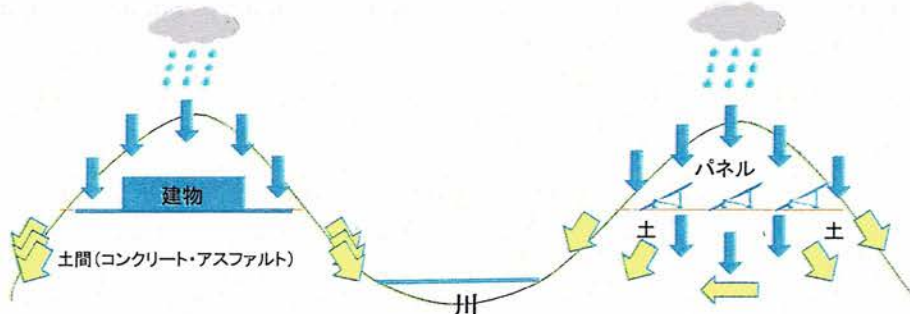
流水係数について

建物や、屋根、コンクリートなどは水を一切含まない様になっております。

= 流出係数 1 雨水が全て下流に流出する。

森林状態の山では、木々や葉、地表の土が雨を吸収します。

= 流出係数 0.6 (40%含み 60%流れるイメージ)



① 開発工事により、住宅・工場・倉庫などを建設すると、流出係数が大きくなり流れ出す水量が増大します。

② 太陽光発電の場合は、伐採・造成し多少流出係数は大きくなりますが、地面は土の状態の為、流出量はあまり増大しません。
造成により斜面地を平面地にする為、流速は遅くなります。

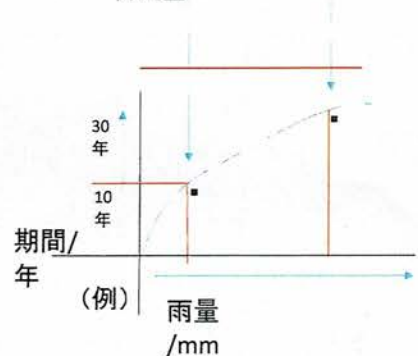
本来森林は40%の保水力がありますが、林地開発申請において、この保水力を0として考え流量計算をするよう指示があり、排水施設の設計を行っております。

斜面を上からや、水平より見ると一見ソーラーパネルで埋め尽くされている様に見える発電所も真横から見ると下記の様に2m程の間隔があり、地面の部分はほとんど土のままの状態が残される為、地面が吸収する雨量の量は若干数しか変わらないと考えております。地表部より派生する雑草についてですが、雑草の張る根も地表を落ち着かせる大切な要因と考えておりますので
除草剤は、一切使用致しませんまた、派生を拒む為のシート等も、一切使用致しません。

当該対象事業用地では、周囲に事業用地全体の約2.5割以上の残置森林を残す様、指示を受けさらにその上で、上記の流出係数を0.6を基礎に雨量の計算算出をしております。よって、異常気象や河川の状況を踏まえると川の氾濫による危険が無くなるとは申し上げませんが、一概に発電所の伐採行為が原因で水害の危険性が増すとは考えずらく、寧ろ危険性については緩和されると考えております。

※30年確率の降雨量

※10年確率の降雨量



* H30-12月議会内容の訂正
(ため池ではない)
(伊東案件とは異なる)